

# だから職員が辞めていく ダメな施設を選ばないために 6

著者	岡田 耕一郎, 岡田 浩子
雑誌名	シルバー新報
号	821
発行年	2008-04-11
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1204/00000199/">http://id.nii.ac.jp/1204/00000199/</a>

6

か  
6

している。普通の仕事として老人ホームを選ぶ際には、疑似家族的組織になっていないかチェックしてみたほうがいいだろう。

ば使われるので、ユニット  
ケア推進論者の声に耳を傾  
けてみよう。利用者と介護

変質していきがちだ。

にそれを否定する論者の見  
解を取り上げることにな  
い(いずれも『ユニット  
ケアのすすめ』筒井書房刊を  
参照)。

いる利用者は「家族」なの  
だから、家族的な親しさか  
らベタベタ接するようにな  
るかもしれない。それが昂  
じると、まるで親のように

う。「利用者と職員に分かれて、それぞれがその場所を死ぬまで演じ続けなければ

の透き間を埋める道具になっている。そのためそれによって、協力する利用者は、介護職員の助けによって自らの生命力を豊かにすることはできるかもしれないが、介護職員のいうことを聞かない

の概念の中にある『親しさ』と、職員の概念にある『労働』とのバランスを、まだ日本はうまく整理できていないのではないだろうか。…疑似家族化が美化されすぎているのではない

れない。

他方、ユニットケア推進

さて、これまでの説明 路に入ってしまった。出口  
で、就職先としてユニット の見えないユニットケアの  
ケア施設を見た場合、それ 明日はどっちだ。

ほとんど単純にお勧めできるものではないことが理解してもらえたと思う。

脳し、その職員たちが疑似家族という幻想を追いかめる強力なマシンになり、ユートピア実現のために利用者を支配するようになる点である。もちろん、職員たちは自分たちがユニットの利用者を支配している女王様様であるとは全く思っていないのだが、結果的にその小さな組織全体をコントロールしているのは職員たちであり、実質的に彼らが世界の創造主であることに変わりはない。ユニットとは、あたかもベンサムのパノプティコン（全てが丸見えで監視される刑務所）であり、職員を「全てを見通す力」を持った女王様様にもしてくれるのだ。

したがって、ユニットケ  
ア施設に就職すること  
は、実は別の見方をする  
と、「愛と連帯」の戦士に  
なることであり、さらに女  
王様にもなることである。  
そうやってしまうと「そっ  
ち」の世界の住人になって  
しまい、もはや「こっち」  
の世界には戻って来れなく  
なるかもしれない。

このように、疑似家族幻想を中心に、現在、極めてスリリングな「そっち」の世界の介護現場が日本中に増殖しつつある。ユニットケアは明らかに価値観の迷